

子育てと母親

山口 美和

私は、児童学を専門とする大学院の修士過程に、かなり長く在席した。修士過程の一、二年目は、週に三日は、子どもと実際にかかわる機会も作り、「子どもといかに関わるのが、子どもにとって良いのか」という答えを、自分なりに見つけようとしていた。子どもに添い、今の子どもの状況をありのままに受け入れ、その子の生を支える、そんな思いで、子どもと関

わっていたように思う。その頃私が関わっていた子どもたちは障碍を持った子どもたちであった。その中で私が気になっていた子どもというのは、その子の居方そのものから、淋しさを私が感じる子どもたちであった。それは感覚的なものであって、言葉で表現するのは困難のだが、私はその子どもたちから伝わってくる淋しさは、特に両親から存在をありのままに受け入

れられていないためではないかと考えていた。そして、私は、子どもたちとともに過ごし、その子たちの淋しさを感じるたびに、その子たちの親に対して否定的な感情を抱いている自分を感じていた。

その頃期せずして、私自身に子どもができた。そのため、「淋しさを感じさせる子どもたち」との関わりも、修士論文も中断することになった。そして、一年の休学ののち、小さいわが子を保育所に預けながら、再び修士論文に取り組むことにした。復学した私は、以前の関心から再びスタートし、「淋しさを感じる子どもたちを作らないために、いかに大人は関わるべきか」というようなことを扱おうとしていた。しかし、自分の子どもを持ち、母親となった私は、以前の私とは少しずつ変わってきていた。

一つには、子どもが一歳を過ぎた頃から、子どもに添って関わるという、以前私がお他の子どもにしてきた関わりを、常にわが子に対してすることができない自

分に気づいたことだった。常に子どもに心を碎かなければならないという考えを持っていた私は、その通りには関われないう自分の力不足に対して落ち込んだりした。その経験は、「子どもといかに関わるべきか」という事に対して、子どもの立場に立つだけでなく、母親側の感情に私自身の目をむけさせるきっかけとなっていた。

もう一つは、近所にいた三歳の子どもの持つ母親との出会いであった。その母親の、子どもへの言葉掛けは、禁止や、感情的な罵声に満ちていた。私は、その態度を受け入れる事ができなかった。しかし、その母親は、暑い夏の日も、朝からビニールプールに水を張り、子どもが水遊びをするあいだ、自分も傍らで過ごしていた。そして、午後は、夕方遅くまで遊ぶ子どもを他の母親と立ち話しながら見ていた。その母親の言葉掛けは子どもの気持ちに添うということからはかけ離れたものではあったが、その母親は子育てに時間と

労力をそそいでいた。私は、その母親の在り方を初めは受け入れる事ができなかったが、しだいにその在り方も受け入れたいと感じ、子育てへの母親の関わり方に関する、私自身の枠組みをもっと広げていけたらという考えを抱くようになっていた。

子どもを持った後に経験したこれらのことから、私は、子どもと大人との関係を、「大人が子どもに添い、今の子どもの状況をありのままに受け入れ、その子を生を支える」という関係だけでなく、もっと大人にも、寄り添って考えてみようと思うようになっていった。

そして、母親が「子どもとのやりとりの中で大変に感じたり、困ったりする事に対して、どのように関わったり、考えたりしているか」ということを実際に調査してみようと考えた。その幼児を持つ母親六十三名に行なった面接調査から得られたことを、書いてみたいと思う。

子育てのなかでの母親が大変に感じる事の多くは、その子どもの年齢の特徴として見られる行動に由来しており、ある程度は多くの母親に共通して体験されることであった。

例として、生活の基礎である「食事」をめぐる母親の語りをいくつか見てみたい。

語り1 食べなかった時期も元気だから心配なかったし、私も小さいときそんなに食べなかったんで。

語り2 むらぐい……偏食……保健婦さんや、友達に相談したり、いろいろやってきたけど、ここまできたらいつかは食べるだろうって開き直って、大きくなったら、自然に食べるようになるかなあと思って……開き直ったら気が楽。

語り1と2は、もちろん子どもの食の細さの程度にも違いがあると思われるが、語り1の母親にとつては、子どもの「食事」に関しては、それほど気になることではなかったようである。それに比べ、語り2の

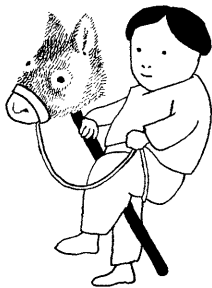
母親は、心配していた時期もあったようで、「食事」の事で、色々な人に相談したり、工夫したりという関わりをしている。そして、子どもの状態に変化はないが、「自然に食べるようになるだろう」と「開き直った気が楽」になったと語っている。

ここで、この二つの語りから二つの事がわかる、一つは「食事を食べない」という行動を深刻に捉えるかどうかということは、それぞれの母親によって差があるらしいということである。そしてもう一つは、語り2に見られるように、子どものむらぐい、偏食といった状況が、改善されていないにもかかわらず、母親は、その子どもの状況を受け入れるようになるということがあるということである。語り2のように、子どもの状況は変わらないがその状況を受け入れるようになったと考えられる語りを、二例あげてみる。

語り3 離乳食……本人も全然食べる気がなくて、食べないのがおかしいんじゃないかと思って、すごく悩

んで……最初は無理やり口に押し込んだり……してたけど、いろんな人に話しを聞いてると、「うちも食べなかったわよ」っていう人も居たりして、そういうのを聞いてるとあーそうなのかってだんだんそういう気持ちになってきて。

語り4 食べてくれなくて、私が泣いたりということもあった……主人が食べさせるときは「いいじゃない」病気もしないし、体重も増えてるって思えるし、口にも出せるし、でも自分が食べさせると、食べてほしいってなっちゃうんで……考えてみると、一週間に一日くらいすごく食べる日があったり……必要な



エネルギーってというのは、一週間、一ヶ月で見たらこの子に必要な量は食べてるんだらうって。

語り2、3、4のように、その母親にとって困ったことと捉えられていた出来事が、その出来事的狀況そのものは何も変化しないにもかかわらず、その母親がその出来事と向き合う中でその状況を受け入れるような考え（棒線部分）に至った過程が語られるということとは、面接調査の中で多くの母親に見られた。また、語り1のようにその母親の中でその状況そのものをそれほど困ったことと捉えていない場合にも、その母親自身がその状況を受け入れる根拠のような考え（棒線部分）を持っているということもわかった。

このような、子育て状況の中で困った出来事を受け入れる考えを母親が持つ事は、どのような意味を持つているのだろうか。困った出来事を受け入れる方向での考えを持つということは、その人自身がその出来事と自分自身の感情との不調和を少なくするのに役

に立っていると考えられる。子育ての中で起こる出来事に対する感情の不調和をそのままにしたまま、毎日を過ごす事は大きなストレスとなるだろう。それは「食事」の例でいえば、一日三回の食事のたびに、食の進まない子どもと向き合い、なぜ食べてくれないのか、どうにかして食べさせなければと思いつけることである。これは大きなストレスであろう。それに対し、「自然に食べるようになる」とか「必要な量は食べているんだらう」という考えは、子どもの「食べない」という現実の方に自分の考えを近付けることであり、これは、母親自身のストレスを低める事になると考えられる。従って、困った出来事を受け入れる方向での考えを見出していくことは、きわめて適応的な在り方であるということが出来よう。

今見てきた食事の例は、子どもの在り方に対する不調和に関するものであったが、次に子どもと関わる自分自身の在り方に対する不調和に関する語りを見てい

きたい。

語り5 イライラしているのを押さえられなくて、いけないと思いつつ怒ったりとか、自分の感情をそのままぶつけて自己嫌悪に陥るっていうのが結構続いたときがあった……本を読んで別に焦る必要もないっていうか、そういうときもあるよねっていうところに落ち着いた。

語り6 「子どもを連れまわして」とか……最初は、乗り物に乗っても本当に周りの人の目が気になっちゃった。被害妄想が多くなっちゃって。周りの人は周りの人。家は家、そんなに道理に外れた事をしなければいいじゃないかって思うようにして。

5、6の語りはともに、自分自身の在り方を受け入れる方向での考えを見いだしていく過程の語りである。語り5は、自分が望ましくないと思っている関わりをしてしまう自分に受け入れがたさを感じている。そして、その受け入れがたい状態を抜け出すことが出

来ないでいたときに、「そういうときもある」という、自分自身の今の在り方をそのまま受け入れる考えを見いだすことで、自分に向けられたネガティブな感情を減らす事が出来るようになっていく。

語り6は、自分自身の欲求は、母親としてふさわしくないのではという思いから、自分自身の行為を肯定できないでいる状態から、自分自身の思いを受け入れる考えを見いだすことで、個としての自分と母親としての自分の間の葛藤を解決した語りである。

母親としての望ましい在り方について書かれた本や雑誌は、巷に氾濫している、そして多くの母親たちはそれらのいくつかにはふれており、「あるべき母親像」を自分自身で持っている。しかし、その母親像に近づけない事が心の負担になってしまうことがあるということ語り5、6は示しているといえるだろう。もう一つ自分自身を受け入れられない語りを挙げる。

語り7 子育てのスタンブになるときがある。……好

き嫌が多いのも、私の作り方がいけないのかなあって……。

語り7のように、自分自身の関わり方を受け入れられない状況は、母親自身を不安定にするだろう。そして、自分自身を受け入れられない状況では、子どもの気持ちも受け入れる事は出来ないのではないだろうか。

母親が、自分自身の枠組みや、在り方を崩さないことが、子どもにとって負担になるという危険性があることも頭に置きながらも、母親が自分自身の在り方を受け入れられないでいる事の、子どもへの負の影響についても考える必要があることを強調したいと思う。

語り5のように母親が個としての自分の思いを大切にすること、語り6のように母親が自分自身の弱さ、不完全さを受け入れる事は、子どもにとっても決してマイナスではないのではないだろうか。母親が個としての自分の思いを大切にすることなしに、子どもの個と

しての思いを尊重することはできないだろうし、また母親が自分の弱さ、不完全さを受け入れる事ができないれば、子どもの弱さ、不完全さを受け入れることもできないだろう。

子育ては、確実に母親に、それまで彼女が持っていた枠組みの問い直しを迫ったり、彼女自身の限界や不完全さに直面する場面を増やすだろう。そういった場面で、枠組みを柔軟に広げたり、個としての自分や自分自身の不完全さを受け入れたりという在り方が、子育ての大変さを軽減していく事につながっているようであるということが、調査から明らかになった。

(家庭生活研究会心理相談室)